

第一回歩き遍路 土佐ノ巻その二

2015年1月23日～1月31日

高知県須崎～別格5番大善寺～37番岩本寺～
高岡神社～真念庵～38番金剛福寺～39番延光寺
遍路距離 200km



前回2回目は土佐宇佐の青龍寺を打ち終えてから巡航船で浦ノ内湾を横浪まで渡り、横浪三里から須崎まで歩いて JR多郷駅^{おおのこう}から電車で帰途についたので、今回第3回目は須崎から始めて土佐最後の札所 39 番延光寺まで打つことにした。土佐は札所間の間隔が長いので、実質1週間で3札所しか廻れなかった。土佐は山上の札所は少ないが、寺間の遍路道は例えば土佐久礼から窪川に越える「そえみみず遍路道」や窪川から市野瀬に越える「片坂峠越」など、きつい山中の遍路道もあった。

(番外霊場大善寺) ⇒

1月23日 (自宅～高松～高知県須崎・番外霊場大善寺)

自宅発7時前⇒岡山駅⇒高知駅⇒須崎駅下車。別格5番大善寺参詣。

この付近はかつては土佐の「親不知」と呼ばれた海の難所で、水難防止を祈願して弘法大師が建立したと寺伝にある。目の前が須崎港。
宿は須崎市街西端のビジネスホテル「マルトミ」。素泊 5500 円、少々高価な割には木賃宿程度。夕食は近くのホルモン屋。



1月24日 (須崎～JR 土佐久礼駅～そえみみず遍路道～岩本寺)

大善寺は番外霊場であるので歩き遍路道からは除外することにして、今回の打ち始め37番岩本寺への始点である土佐久礼まで JR 土佐新庄駅（須崎駅の一つ西の駅）から土讃線に乗った。電車の窓から須崎湾に昇る朝日が荘厳に見えた。

土佐久礼から窪川に越える遍路道は2本ある。^{そえみみず}添蚯蚓遍路道と大坂遍路道である。前者は中世頃からの幡多から須崎に抜ける土佐往還であったが、明治25年に大坂谷から七子峠（七郷峠が変化）に抜ける新道（車道）が開通してからは廃道となり、最近になって「へんろみち保存協力会」の手で復活された旧遍路道である。

“添蚯蚓”とは奇妙な名前であるが、蚯蚓がのたくったようにウネウネと曲がりくねった山道の意であり、“本蚯蚓”という別の山越えの道があり、この“本”とは別方面に作られた道という意味で“添”が付加されたらしい。

さて、どうせ歩くなら古い道の方をとその添蚯蚓に入ったが、これがなかなかの曲者であった。左程高くないのだが、標高500メートルほどの山越え道である。途中に高速道路が走っていて、一旦登った山道を麓まで下って高速道路の橋脚下を潜り、再び急な何百段もの階段を登り返すような心臓破りの山道にはマイッタ。添蚯蚓では誰にも遇わなかった。

この道は、山頂まではゴロタ石と枯れ枝が詰まったトレンチで歩きにくいことこの上もなかったが、途中には苔むして朽ち果てた遍路墓があって、往時の遍路の様子を彷彿とさせた。山頂から上のトラバース道は快適なプロムナードコースとなった。



プロムナード道

遍路墓⇒

←ゴロタ石のトレンチ道



(須崎の海も見えた)



添蚯蚓を2時間半程歩くと、大坂遍路道と国道56号が添蚯蚓遍路道に合流する床鍋集落に着いた。ここには道端に山頭火の句碑があったので、30分程昼食の休憩をさせて貰った。「人生即遍路 山頭火」。

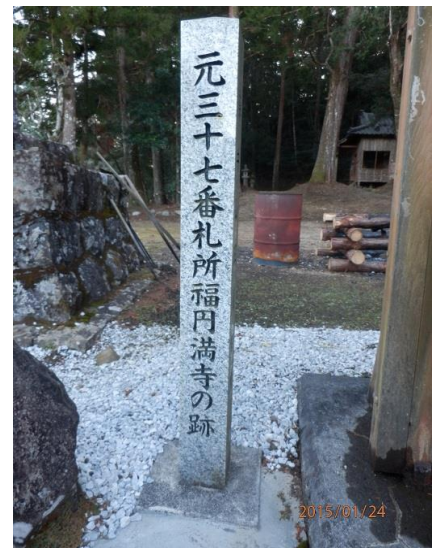
昨夜宿で飲もうと思ってコンビニで買っておいだした缶ビールがザックにあったので、生温くはなっていたが、これも頂戴した。

さて、ここから4時間ほどトポトポと歩き続けて、窪川の町に入り、37番岩本寺に詣でた。岩本寺は本来は37番札所ではなく、窪川の北にあった福円満寺という古刹が37番で、岩本寺は17里先の次の38番札所・足摺岬の金剛福寺までの中間宿坊に過ぎなかったのが、福円満寺の衰退後に札所権を手に入れて札所となったそうだ。福円満寺は、当時仁井田郷にあった仁井田五社の別当寺で、それぞれの社に祀られていた本地仏である不動明王、観音菩薩、阿弥陀如来、薬師如来、地藏菩薩を岩本寺に移したので、岩本寺は御本尊が5体あるという珍しい寺である。従って御真言もそれぞれの御本尊別に5種唱えなければならないので些か煩瑣なことではある。

福円満寺跡は仁井田五社の一つ高岡神社の境内にあり、その石碑もあった。当時は岩本寺の奥の院だったそうなので、“奥の院派”の小生は岩本寺から3kmの道を歩いて行ってみた。高岡神社の本殿は今は淋しげな佇まいであったが、由緒ありそうな社域は相当に広く、その中にあった福円満寺も当時は隆盛を誇っていたのであろう。当時の神仏習合の様子が偲ばれる。



高岡神社⇒



《岩本寺の御真言》

なうまく さんまんだばさらだん せんだまかろしゃだ そはたや うん たらたかんまん (不動明王)
おん あろりきや そわか (観世音菩薩)
おん あみりたていせい から うん
(阿弥陀如来)
おん ころころ せんだり まとうぎ
そわか (薬師如来)
おん かかか びさんまえい そわか
(地藏菩薩)

(岩本寺 歓喜天〔聖天堂〕) ⇒



また、岩本寺は、本堂を新築した際に本堂本陣格天井画を全国から募集し、花鳥風月、人間曼荼羅などが575枚が集まったそうで、これらが本堂の天井を飾っている。マリリンモンローや猫の絵もあった。



寺の中を土佐くろしお鉄道の線路が通っているのも珍しいことである。

宿は、道端を掃除していた料亭らしき店のオバサンに聞いたら、旅館もやっているのどうぞとのこと、渡りに舟で泊めて貰った。古いが由緒ありそうな立派な旅館であった。美馬旅館、控えの間付部屋 8,000 円。



(美馬旅館)

6:15 ビジネスホテル発⇒6:20 ジョイフルで朝食⇒7:17 土佐新庄駅乗車⇒7:30 土佐久礼駅着・下車⇒
8:30 添蚯蚓登山口「酔芙蓉」⇒10:50 床鍋・山頭火碑(弁当 40 分)⇒16:00 岩本寺⇒17:30 高岡神社
(高岡神社からは暗くなり、地理不案内だったのでタクシーを呼んで 17:45 美馬旅館着、タクシー870 円)
[本日の遍路距離 25 km]

1月25日 (岩本寺～市ノ瀬～土佐佐賀)

37番岩本寺から足摺岬南端の38番金剛福寺までは、歩きで4日間掛かる。途中には八十八霊場の札所は無いので、これから4日間はひたすら黙々と歩くのみ。

本日は、ただただ国道56号を「峰ノ上、標高 290m」を越えて土佐佐賀まで歩くのみ。途中、峰ノ上で国道56号のスイッチバックの大曲(片坂大カーブ)を避けるために国道を離れて遍路道に入り、急な山道を国道に下った所の市野瀬で道を迷ってこの国道の大曲に逆戻りし、道路上の行先表示が何かおかしいと気付いた場所は何と先程越えて来た峰ノ上であった。四国は、例え国道でも山中には民家1軒も無く、また人通りも全

くないので道を聞く術がないのがつらいところ。再びトボトボと来た道を引き返し市野瀬に戻ったが2時間をロスしてしまった。市野瀬から峰ノ上までは片坂と呼ばれる急坂で、この坂を昇り切る1時間に1日分のエネルギーを費消してしまった（逆に、峰ノ上から市野瀬に下る遍路道は急降下が連続する山道で、谷底に転落しそうな崖径であったので、こちらも神経が消耗した。いずれも踏んだり蹴ったり!!）。

市野瀬からまた気を取り直して山中の国道を歩いていたら、拳ノ川峠という峠を下った所に土佐佐賀温泉「こぶしの里」というリゾートホテル兼レストランがあった。団体遍路観光バスも停車していたので、観光遍路指定宿になっているのかもしれない。腹も減っていたので、天の配剤これ幸いと、食堂に入ったが、昼食時間を過ぎていたので喰い物は無くビールを大ジョッキで2杯飲んだ。聞けば、すぐ近くに「土佐くろしお鉄道」の駅（荷稲駅）があるという。足もストライキを起こしていたので、早速この弘法大師の有り難い御教えに従って、本日の宿・佐賀土佐駅まで乗車した。

宿は民宿「坂上」、6500円。古くて淋しい民宿であったが、オカミの対応は良かった。宿帳を見ると、今年の1月1日以降の25日間、泊り客は一人も無かった。本日も小生1人。隣にも「内田屋」という民宿があったが、こちらは門構えは立派であった。

本日も遍路には誰にも会わず。一体に、このシーズンは歩き遍路もお休みらしく、冬期は休業している民宿も多いらしい。

8:30 美馬旅館発⇒10:00 峰ノ上⇒(急な下り)10:45 市野瀬(道迷いで2時間ロス)⇒再び市野瀬に戻り 12:50 同発⇒14:15 こぶしの里、同発 15:15⇒15:30 荷稲駅着、同駅 15:50 乗車⇒土佐佐賀駅着 16:03⇒16:30 民宿。

[本日の遍路距離＝30km]



土佐くろしお鉄道「荷稲駅」



本日の民宿から海の眺め（鹿島と鹿島ヶ浦）

1月26日 （土佐佐賀～四万十市・下田）

本日は、計画では四万十川の河口を昔ながらの「下田の渡し」で渡りたいものと、遍路道からは遠回りになるが、態々四万十川河口にある宿を昨日予約した。「四万十の宿」という名前であったので、普通の民宿程度の宿かと思ったら、これがまた立派な温泉リゾートホテルで値段も相当なものだったが、この付近には他に宿がなかったので、ここを予約するしかなかった。

更に悪いことに当日は朝から雨だった。真冬の雨の中を歩くのもキツイので、土佐佐賀駅から土佐くろしお鉄道で中村駅まで行き、中村駅からバスで宿に行ったが、この間たった1時間程の乗り物の旅となった。

宿には10時半頃着いたが、部屋にはチェックインできず、レストランの般若湯で時間を潰すしかなかった。この般若湯も結構なお値段になった。悪いことは重なるもので、予約制の「下田の渡し」に電話したところ、明日は波が高い予報なので欠航とのこと。が、翌朝の河口は波静かなものだった。さては、少ない客を悪天を理由に断るための口実だったか？

これでは何のためにわざわざ大廻りをして、しかも高いホテルに泊まったのか分らない。

コンチキショウメ！ 今回の遍路で最低の一日であった。

8:30 民宿発⇒8:51 土佐佐賀駅乗車⇒9:23 中村駅着／同バス発 10:11⇒10:40 「癒しの里」 着
癒しの里「四万十の宿」 1泊2食 8,800 円。料理も部屋も値段だけの良さはあった。

[本日の遍路距離＝30 km、ただし全行程鉄道とバス]



1月27日 (四万十市・下田～下ノ加江～大岐ノ浜～土佐清水)

前述の如く、期待していた平田の渡しが欠航だったので、宿からバスで四万十川の最河口寄りの四万十大橋まで戻り、この橋から本日の歩きをスタート。歩き遍路の道は下田の渡しの対岸「初崎」から津蔵淵を越えて下ノ加江に下るのであるが、渡しが欠航だったために逆戻り迂回5 kmをロスしたことになる。コン畜生メであるが、文句ばかり言っていては御利益も逃げるので前に進むことにしよう。



(四万十大橋の欄干)



(四万十大橋から河口を望む。遍路道は右岸沿いに下流へ)

市野瀬から39番延光寺方面に少し入った所に番外札所の真念庵がある。ここは38番金剛福寺を打ち終わって、39番延光寺に戻り打ちする途中に巡礼する予定であったが、天気予報によると延光寺へ歩く日は雨天の予報であったからバスを使うかもしれない、バスを使えばこの場所は通らないので、行き掛けの駄賃に早めに巡拝しておこうと立ち寄った。

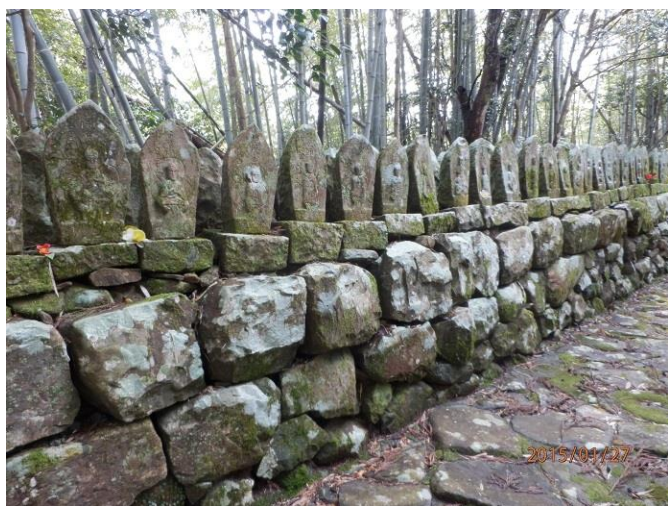
真念とは、江戸時代前期の僧侶で、四国八十八カ所を特定した「四国遍路の父」 宥辨真念（ゆうべんしんねん）のことである。この市野瀬と言う場所は、窪川の37番岩本寺から足摺岬の38番金剛福寺までの長い道中の途中にあり、また、足摺岬から打ち戻って次の39番延光寺へ行く長道中の分岐点ともなっている場所である。真念はこの三札所を結ぶ難路の真ん中である市野瀬に地蔵堂を建てて、足摺岬から打ち戻る遍路の遍路宿や荷物一時預かりなど遍路の便宜を図った。この地蔵堂が真念庵と呼ばれるようになった。

足摺岬までは長くて困難な遍路道であったから、足摺岬の金剛福寺まで1丁ごとに350ケの遍路石（遍路道しるべ）が設置されていたそうで（「足摺遍路道三百五十丁石」）、今では道路工事などで消えてしまったものが多いらしいが、この真念庵近くの遍路道（山道）にはいくつかの風化した遍路石が残っていた。これらの遍路石は作州、播州、摂州などからの遍路が寄進したという。遍路道には同じく風化した遍路墓も沢山あった。

また、地蔵堂には八十八霊場の本尊石仏が安置されているので、或いはこの辺りまで来て動けなくなった遍路や行き倒れ遍路のための遥拝所（超ミニ遍路巡礼版）であったのかもしれない。



（真念庵）



（八十八霊場の本尊石仏群）



← 遍路石
（あしずり道）

遍路墓⇒



今日は、大岐ノ浜辺りの民宿に泊まる予定だったが、泊まる場所が見つからず、仕方がないので、清水市街地まで歩いて、清水市街地中心部の民宿に泊まった。
「民宿清龍」、古くて汚い宿、B & B 5,000 円。

7:30 ホテル発(バス)⇒8:00 四万十大橋⇒10:00 今大師巡拝
⇒10:30 今大師発バス*⇒10:40 市野瀬下車⇒11:00 真念庵
⇒11:30 市野瀬発⇒(途中で食堂昼食 1 時間)⇒18:00 清水市街地着。[本日の遍路距離= 30 km]

(*今大師から市野瀬に抜ける国道 321 号新伊豆田トンネルは 1,600m、ダンプカーなど大型のトラックが飛ばしているので危なくて歩けず、トンネル内のみ折から来たバスに乗った)

誰が立てたのか、このような道標もあった(四万十大橋西詰)⇒
『金鋼福寺まで 38km。あしずりの西まわりにジョン万次郎の記念館があります。金鋼福寺から延光寺へは打ちもどりと絶景の西ルートもあります。三原村でのお泊りは「清水川荘」もあります。歩き遍路マーク(子どもたちとつくりました)』
「金剛福寺」の「鋼」が泣かせる。

1月28日 (土佐清水～足摺岬第38番金剛福寺)

昨日は清水の街まで足を延ばしたので、今日は足摺岬までの行程にかなり余裕ができた。清水には「あしずり港」の「海の駅あしずり」にジョン万資料館がある。市街地から西側に 3 km ほど離れているが、足摺岬に出発する前に歩いて見学してきた。殆どが写真展示ではあったが、なかなか立派なものだった。ジョン万次郎については井伏鱒二の「ジョン万次郎漂流記」に詳しいが、彼はここ足摺の漁師であった。私は漂流物が好きなので、足摺岬からの帰途ジョン万が生まれた「中浜」にも立ち寄って、復元された生家や記念碑も見てきた。



展示されていた
ジョン万の肖像⇒



ジョン・マンの生涯

- ・万次郎は、文政10年(1827)に、中浜谷前の漁師悦助の二男として生まれた。幼少の頃より土地の老役今津家の下働きに出て母を助け、14歳の時、宇佐浦(土佐市)の漁船に乗り組み、足摺岬沖での初漁中に遭難し、九死に一生を得て仲間と共に南海の孤島(現在の鳥島)に漂着した。
- ・143日間もの無人島におけるサバイバル生活の後、米国捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助され、船長ホイットフィールドとの出会いにより、以来10年間、ジョン・マンと呼ばれて、米国本土での初等・中等教育を受け、英語、数学、航海、造船等高度な学問を習得した。また、捕鯨船の一等航海士副船長として、七つの海を奔走し大活躍をした。
- ・嘉永4年(1851)に、母国日本に帰りたい一念から、大冒険を敢行。厳しい鎖国令下の琉球に上陸し、米満、薩摩、長崎、土佐藩で、一年十ヶ月にも及ぶ執拗な取り調べの後、やっとの思いで中浜で待つ母、汐との束の間の再会がなかった。
- ・定小者という土佐藩の下級武士から風雲急を告げる江戸城下の直参旗本に抜擢された万次郎は、その時生まれ故郷の地名を名字として、中浜万次郎と名乗る。時あたかも大船建造禁止令の解除や、日米修好通商条約の批准と相まって、造船、航海、捕鯨等の技術指導に東奔西走した。また、日米修好通商条約調印のための使節団の一員として、通弁主務は勿論、咸臨丸の事実上の艦長として、その大役を見事に遂行した。
- ・明治2年(1869)開成学校(現東京大学)の教授に任ぜられ、中博士の称号で最高学府の教壇に立つなど、維新前後の激動期に、日米交流の架け橋として、国際的、文化的に果たした功績は誠に偉大である。明治31年(1898)11月12日、東京京橋弓町において、長男東一郎(医博)に看取られながら、波乱万丈の71才の生涯を終えた。
- ・「冒険とは、夢を形に変える行動力である。」平成3年(1991)の万次郎漂流150周年を機に、郷土の偉大なる先人、中浜万次郎の限りない人間愛と、不撓不屈の精神(ジョンマンスピリッツ)を顕彰し、その遺徳を長く後世に伝える。

さて、清水から足摺岬までは海岸沿いにウネウネと歩いて5時間も歩けば十分と踏んだので、ジョン万資料館から帰ってゆっくりと清水の街を昼前に出発した。この海岸沿いの道は海岸美が堪能できる遍路道であるが、深く入り込んだ清水港を大きく迂回して西岸に入る所で道を迷い、山中にズンズンと登って行った所で大きな道路に出た。これは後で考えると足摺半島の真ん中の山中を貫いている旧スカイラインであったのだが、途中には民家なども全く無く、歩いている人も誰もいないので道を聞く訳にもいかず、これが海岸沿いの道路かも知れないと登って行った。いくら歩いても海岸には近づかず、どんどん標高も上がっているようで、やはり道を間違ったかと感づいても後の祭り、もう引き返すこともできず、このウネウネとしたスカイラインを伝うしかなかった。道路は大きな道だったが歩道は全く無く、ウネウネと曲がっているので飛ばしてくる車に出合い頭に轢かれそうになって生きた気もしなかった。スカイラインではあったが、岬の展望台を除き眺望は全く無く、ただただ通過する車の音に神経をとがらせつつこのうんざりするほど長い山岳道路を黙々と歩くのみだった。後で聞いたら、ここを歩くような馬鹿な遍路はいないということだった。



(道路は良いのだが・・・)



(スカイライン唯一の岬の展望台。向うの岬は蟻崎。大岐ノ浜は左奥)

このスカイラインの頂上は標高 460m の白皇山で、その山中には足摺岬 3 8 番金剛福寺の奥の院跡という白皇神社屋敷跡というのがあるそうで、奥の院派の小生も巡礼してみたかったのだが、登り 30 分という看板が立っていて我が足はストライキをを起こしそうだったし、径も獣道程度の淋しそうな気味悪そうな道だったのでご遠慮させて頂いた。

さて、足摺岬は、かつては潮岬、室戸岬と並んで補陀落渡海信仰のメッカであった。これらの地はいずれも西方浄土に繋がる南の海へ突き出した鼎の脚である。

補陀落渡海は、究極の捨身行とされ、初めの頃は高僧が自ら進んで補墮落舟に乗ったらしいが、いつの間にか人身御供的な要素が加わり、嫌がる行者を無理やりに乗せて流したとも言われている。補墮落舟の船上に造られた屋形には扉が無い。屋形に人が入ると、出入り口に板が嵌め込まれ外から釘が打たれて固定されるためである。その屋形の四方に 4 つの鳥居が建っている。これは「発心門」「修行門」「菩提門」「涅槃門」の死出の四門を表しているとされる。それぞれの門は遍路でいえば、それぞれ阿波、土佐、伊予、讃岐の霊場に擬されている。

渡海は北風が吹き出す旧暦の 11 月に行われた。渡海船は伴船に沖に曳航され、綱切島近くで綱を切られた後、朽ちたり大波によって沈むまで漂流する。もちろん、船の沈没前に渡海者が餓死・衰弱死した事例も多かったであろう。しかし、船が沈むさまを見た人も、渡海者たちの行く末を記した記録も存在しない。ちなみに補墮落とは観音菩薩の浄土を意味するサンスクリット語（梵語）の「ポタラカ」、「ポータラカ」（Potalaka）の音訳である。チベットの「ポタラ宮」もここから来た命名であるそうだ。

序に、鎌倉時代にできた「発心集」という説話集によれば、平安の頃、賀東上人という僧がこの岬で修業していた。上人をお世話をする小法師が一人付いていた。この上人は補墮落渡海をするには未だ修業が足りないと行に励んでいたが、その内もう一人の小法師がどこからか来て、この二人の小法師が先に渡海してしまった。発心集によれば、「坊主あやしくて忍びて見送るに岬に至りぬ。一葉の舟に棹さして南を指していく。坊主泣く泣く『われを捨てゝいづくへ行くぞ』といふ。小坊主『補墮落世界へまかりぬ』と答ふ。見れば二人の菩薩になりて、舟の艫軸に立ちたり。心憂く悲しくて、泣く泣く足摺をしりけるより、足摺の岬といふなり。岩に足跡とどまるといへども、坊主はむなしく帰りぬ」。即ち、観音菩薩になった小坊主に先に渡られてしまった僧は、足摺りをして悲しんだという訳であるが、“足摺り”の段はどうも作り話臭い。“足摺り”というのは、波が打ち寄せる荒々しい磯を渡って行く時に、足摺りしながら歩かなければ波に吞まれてしまうというところからきているのではなかろうか。

さて、夕方にやっと足摺岬に着いた。暗くならない内にと、金剛福寺に納経し、また、上述の白皇山から下りてきた奥の院である白皇神社に参詣した。金剛福寺は 4 万坪という広大な境内、大きな山水の池もある立派な寺であった。多宝塔も大きくて荘厳な佇まいであった。四国最大の霊場の一つである。目の前は足摺岬。また、前札所 3 7 番岩本寺からは 8 0 km、歩けば 3 泊 4 日という四国 8 8 ケ所の中で一番長距離の「修行の道場」である。伽藍も立派な大寺であるが、鎌倉時代の女官の日記「とはずがたり」によれば、『かの岬に堂一つあり。本尊は観音におはします。隔てもなくまた坊主もなし。ただ、修行者、行きかかる人のみ集まりて、



（補陀落渡海舟）

上もなく下もなし』とある。粗末な御堂が一つだけあって、そこで行き交う修行者が上下の隔てなく修行に励んでいたのであろう。

この寺は、山号院号寺号は「蹉跎山 補陀洛院 金剛福寺」という。「四国霊場第三十八番足摺山」と彫られた古い石碑が山門前にあったので、このような山号もあったのかも知れない。山門の扁額には普通は山号が記されているが、この金剛福寺の山門には「補墮落東門」と彫られていた。寺伝によれば、これは平安初期の能筆家「三筆」の一人嵯峨天皇の宸筆という。西方浄土への東側の入り口という意味であろう。



(本堂前には山水の泉池)



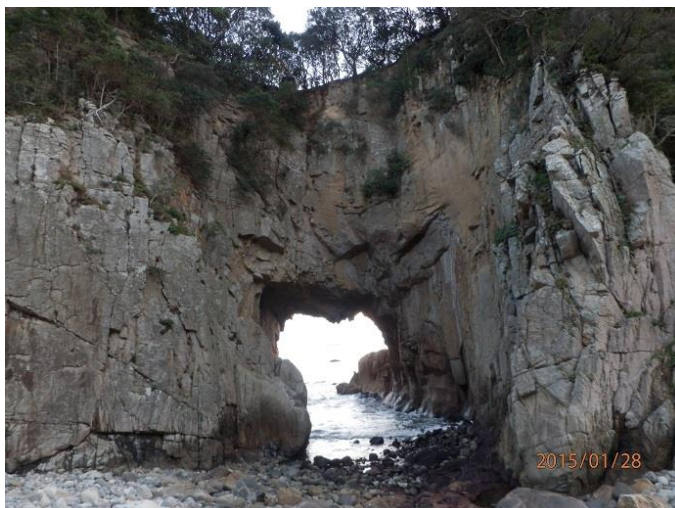
(境内にはビッシリと観音像や不動明王像が並んでいた)

霊場に参拝した後は、岬のビューポイントである白山洞門や天狗の鼻を廻った。この辺りはかつての奥の院であった場所であろうか。また、展望台には大きなジョン万の銅像があった。

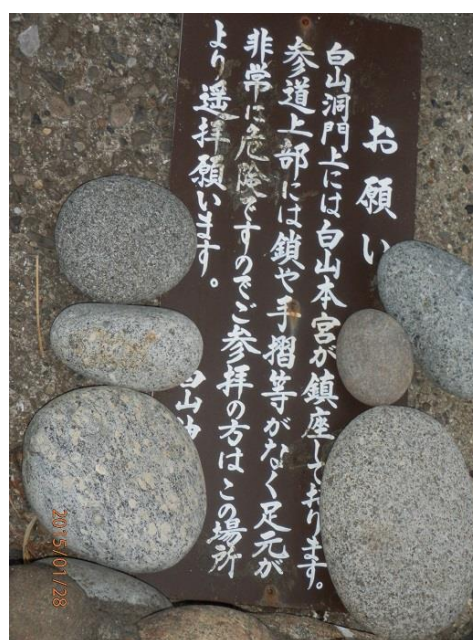
今夜の泊まりは観光・宿泊案内所が紹介してくれた「民宿田村」。老夫婦で40年前から遍路民宿をやっているという親切で清潔な宿であった。料理も美味かった。同宿の釣り人の話では、夕食に出た鯖の刺身は普通では滅多に見られないような採りたての鯖であったそうだ。おまけに嬉しいことに、歩き遍路には消費税相当分の払い戻しサービスがあり、また、この宿が力を入れているという“ジョン万をNHK大河ドラマに！”というキャンペーン帳に署名すればキリンビール大1本のお接待に与れるというのも誠に結構であった。



(四国絶景 No. 1 とされる天狗の鼻から足摺岬灯台)



(白山洞門、上に白山神社本宮)

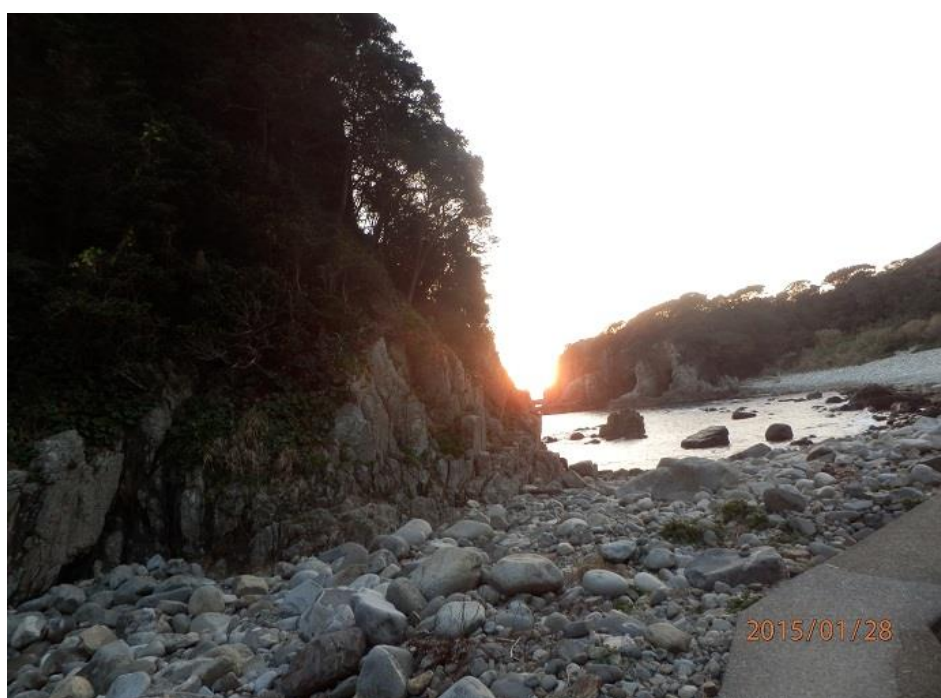


白山洞門（左）の
向うに夕陽が沈む。
夕陽の落ちる所は
補墮落常世。

9:00 民宿清滝発⇒ジョン万
資料館。再び民宿に戻り
11:00 民宿発⇒16:16 足摺岬着。

民宿田村:6500 円。マル優。
お遍路には 6000 円でサービス。

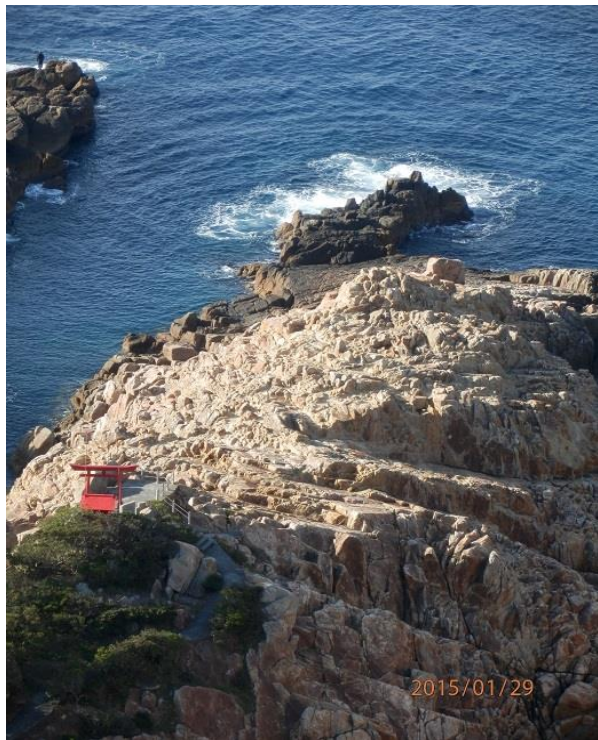
[本日の遍路距離 22 km]



1月29日 (足摺岬～下ノ加江)

今日は足摺岬の西海岸沿いに清水まで戻り、清水から下ノ加江に戻って泊まった。西海岸では少し遠回りになったが黒潮が日本で最初に接岸する場所と言われる^{うすばな}臼碔の絶景を見た。ここには磯の岩の上に赤い竜王宮神社があり、竜宮信仰の名残をとどめていた。

竜王宮神社は、元来は常世の補墮落に居る竜王を招来したものであるが、後世では豊漁の神様として祀られており今でも豊漁を祈る時には、猟師の女房が裾を捲って竜王に尻を見せるのだそう。この風習は、かつて漁師が沖で遭難して戻らなくなった時に、猟師の女房が海に向かって女陰を出して主の無事の帰還を海神に祈ったという悲しい故事からきているという。



(臼碔と竜王宮神社)

松尾という浜は、土佐の鯉節で有名な宗田節の名産地で、かつてその網元だった吉福家住宅が国の重要文化財に指定されているというので見に行ってみた。荒れてはいたが、広大な屋敷だった。

中浜は、ジョン万の生地である。小さな漁港の入江であった。浜を見下ろす高台にジョン万の顕彰碑が建てられており、集落の奥に復元された生家があった。



(臼碔から足摺岬方面)





土佐清水から来た時と同じ道に戻り、途中大岐ノ浜を歩いたりして、下ノ加江の民宿に泊まった。ロジ・カメラ。八板橋の傍。大阪の御夫婦が「高知県移住プロジェクト」を活用して昨年からはじめた民宿だそうで、新築の綺麗な洋間であった。夕食はレトルトカレー一品、朝食はパンとセルフコーヒーだけであったが、値段は善根宿よりも安い1泊2食付3000円というのが泣かせる。前々日にここを通った時にお接待で貰った煎餅の袋の中に宿の案内が入っていたので、電話で予約した。冷暖房完備、ベッドには電気毛布まで敷かれていた。そこらのビジネスホテルよりはるかに立派であった。

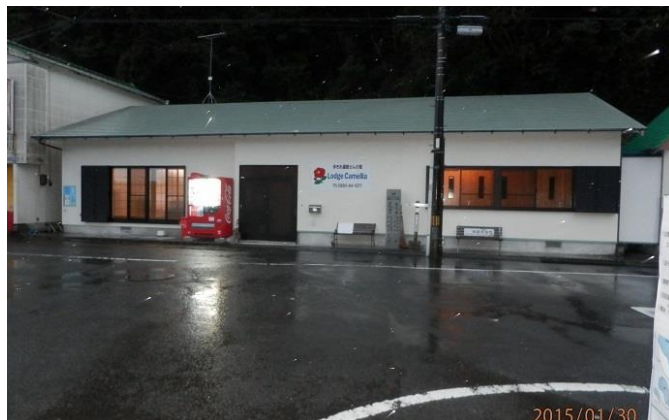
大岐ノ浜。
ここも
遍路道。
左奥が
足摺岬。



8:00 民宿田村⇒10:00 臼磬⇒11:30 中浜⇒
11:50 中浜峠（昼食。民宿田村のお接待弁当）
13:15 土佐清水⇒14:50 大岐ノ浜⇒
15:45 バス乗車⇒16:15 ロッジ・カメラア

[本日の遍路距離 27 km]

（ロッジ・カメラア、下ノ加江⇒）



1月30日 （下ノ加江～39番延光寺～岡山に帰着）

残念ながら、朝から予報どおりの雨となった。本日の行程は下ノ加江から真念庵を經由し、三原村の真念遍路道という山坂を越えて宿毛市に入る30 kmの道であるから大凡10時間は掛かる。ロッジ・カメラの御主人も「何も氷雨の中を歩くことはないヨ。バスが中村駅経由で延光寺入口まで運行しているので、バスを利用したら如何？ 歩き遍路と言えども、臨機応変も大切だね」と渡りに舟のアドバイス。遍路宿の御主人の御教えは弘法大師の御教えでもあるので、有り難く従がった。この辺のバスは通学用のバスであるから、早朝に1便しかないが、乗車時間1時間ほどで延光寺入口（寺山口バス停）に到着。

ところが、誠に残念なことに、寺に着いた時には雨が上がって青空が覗き始めた。今日の通過予定コースの三原村や真念遍路道の佇まいは是非見たかった所なので、多少出発を遅らせて天気待ちすれば予定どおり歩けたのだった。4日前の四万十市での雨と同様、今日の雨も運が悪かった。既に88霊場の半数に近い霊場を廻って来たというのに、未だ御利益が無いということは余程前世の因縁が悪くまた今生でも悪行の数々を重ねて来たということか。マ、今回も毎晩毎晩の般若湯だけを楽しみに歩いて来たので、弘法大師にも見放されて同行一人となったのかも・・・。

これで延光寺を打ち終わって、「修行」の土佐編は打ち済みとなった。「修行」とは「苦行」の意であり、かつては長くて困難な遍路であったのであろう。今は海岸沿いも国道などの道路を歩くが、当時はゴロゴロ浜などと呼ばれた危険な荒磯を歩いていたのであった。

これからは伊予の「菩提」と讃岐の「涅槃」という誠にありがたき巡礼が始まるのである。



（39番延光寺）



（竜宮から亀が運んできた梵鐘、延喜11年[911年]の銘）

（これが山号の「赤亀山」となった）

かつて明治大正の頃は、この辺りには「泊まり屋」という若衆宿が200軒ほどもあり、若衆入りした若者の団体研修や集落の見守りや災害時の救助活動、また交際や娯楽に供されていたそうであるが、夜間の風紀を

乱すなどの理由で取り壊され、今は僅かにこの芳名地区に4カ所を残すのみとなっているそうだ。その中でも「浜田の泊まり屋」は国指定の重要民俗資料に指定されている。4隅の柱には根が張った栗の大木が使われている。地面に転がっている石は力比べの石である。

子供が男になった若衆宿なる物を見たかったので、延光寺でこの泊まり屋までの道を聞いて歩き始めたが、道標や人家も全く無く、人も全く歩いていないのでかなり迷い、1時間ほども掛かった。昔田舎で子供だった頃、上級生から雨の日などに出作り小屋に誘い込まれて「オ○○コ」遊びなどをやったことを懐かしく想い出した。

[本日の遍路距離 40 km、但し 30km はバス]



芳奈の泊り屋

幕末から、明治、大正にかけて、幡多の各地に百八十ヶ所もあつた泊り屋も、今ではこの芳奈に四ヶ所を残すだけとなった。

泊り屋は別名やぐらともいわれ、戦国時代の一村一域の頃、見張りのために建てられたやぐらがその起源であるといわれている。そのためか、すべて集落の入口か中央の見張りしつよい所に建てられていた。

この泊り屋は、集落の警備や若衆の夜なべ、娯楽、研修、或は社交の場となり、幕末以後全盛を極めたが、明治末年頃より夜学が盛んとなって、床の低い公会堂に改築され、或は風紀を乱すという理由でつぎつぎとこわされていった。

わずかに残った芳奈の泊り屋は、昔の若衆組の研究資料として、又浜田の泊り屋は、昭和三十三年、国指定の重要民俗資料となり、他の下組、靴拔、道の川の泊り屋はともに県の文化財の指定を受けて保護されている。

浜田の泊り屋は、九尺四方、木造高床式の平屋建てで屋根は入母屋造り葺瓦葺である。明治十四、五年頃の改築で、四隅には根のはった自然木を踏ん張りせ、下部に比して部屋は小さくし、屋根の勾配をゆるく、軒先には僅かに反りを付たせ、いかにも美しく、しかも安定した風格のある姿で、幡多の各地にあつた泊り屋の中でも最高クラスのものである。

他三ヶ所の泊り屋もすべて木造高床式平屋建てで一間半に二間、下組の泊り屋は柱も自然木を使い、屋根は切妻、杉皮葺で明治中期頃のもの、靴拔と道の川の泊り屋は柱も四角、屋根は瓦葺で明治末と大正初期のものである。

これらの各泊り屋の床下には若衆達が娯楽として使用した数個ずつの力石が今も残っている。

2015/01/30

(「第1回歩き遍路」土佐ノ巻その2 了)

「第1回歩き遍路」目次に戻るには、ブラウザーの戻るボタン  で戻って下さい